

アンケート「わたしの初きゅん詩」

五十音順

このアンケートでいう「初きゅん」とは、「初恋の詩」という意味ではありません。初めの「詩」というものを意識した、あるいは、心をぐっとつかまれたという意味を込めています。「詩」に主体的に出会った最初の一編（あるいは一冊の詩集）にまつわる思い出を、十五名の方にお寄せいただきました。記載は次のような要領になっています。

- ① 詩のタイトル、作者名
- ② いつ、その詩に出会ったか。
- ③ どのように出会ったか。

なお、桜井信夫さんからは、アンケートお断りのお手紙をいただいたのですが、そのお手紙が、充分回答になっていると思われるので、ご了解いただいた上で掲載させていただきます。

● 赤羽じゅんこ（作家）

① 寺山修司歌集

② 高校生

③ 私は、詩への関心は薄い方なのだろう。小中学校時代、教科書でいくらでも詩と出会っていたらうに、胸キュンしたおぼえはない。

それだけに、突然出会った寺山修司の短歌は、印象的だった。

紹介してくれたのは、高校の古典の先生。授業が楽しい先生ではなかったが、雑談はおもしろく、いつも雑談にならないかと思いつながら授業を聞いていた。

先生から聞いてすぐ、池袋の古本屋で寺山修司の短歌や詩と出会った。どれも孤独の影があり、淋しさをたたえていたが、大学受験を控え不安をかかえていた当時の私には、その影が妙に魅力的に写った。

そのあと、寺山修司をまねして、こっそり短歌の創作をしたりした。児童文学を書き始めるよりも、ずっと前のことだ。

● 江口あけみ（詩人）

① 「道程」高村光太郎

② 中学生

③ 中学の国語の教科書で、高村光太郎の「道程」という詩に出会ったとき、力強いその言葉の連なりに強く惹かれました。文章とは違う「詩」という形で自分の心を伝えられるのだということを知りました。微妙な感情の揺れ、心の揺れが、文字と文字との間から伝わってくることの驚を感じました。それからは好きな詩があると小さなノートに書き取って持ち歩きました。その頃、フランスの詩人ベルレーヌにも強く惹かれました。そのベルレーヌについて、堀口大学は、こう云っています「魂の生の告白、心臓の鼓動を生きたまま、精神の動揺をありのまま詩にとらえようとした詩人である」と。

その後、日記の延長のような形でずっと詩らしきものを書き続けてきました。恋をしたときには恋の詩を、苦しい時には応援歌として、子育てのときには子どもと共有できる詩をと、詩は必要なければ私に寄り添ってくれました。